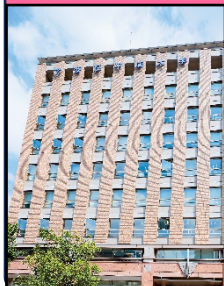


難聴児の言語発達と他者感情の推測能力の検討



【池袋キャンパス】健康メディカル学部 言語聴覚学科 准教授

野原 信 Nohara Akira

URL : [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード : 聴覚障害児・言語発達・他者理解



研究の概要

SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を

学童期は、集団でのやりとりが活発化し、他者の発言や行為の意図を状況文脈の中でとらえ判断する能力の獲得が重要な時期です。特に、他者の意図理解に、他者自身の特性（嗜好など）からの判断（例：Aが飴を貰って困ったのは、飴が嫌いだから）だけでなく、社会的知識（対人的な配慮など）を用いて集団との関係性からも判断（例：Aが困ったのは、周りに友だちがいるのに自分だけが飴をもらったから）できることが、よりよい対人関係を築く上で重要です。

筆者ら（野原・廣田 2018）は学童期の難聴児を対象に、会話時の他者の意図理解について、同年齢の聴児と比較検討をしました。その結果、難聴児では社会的知識の文脈ありの場面課題、とくに集団での対人的な配慮を背景とした場面で、他者の意図理解に難しい傾向を示しました。難聴児は、聴覚情報の制限により言語発達に課題を呈するため、適切な支援が求められますが、社会的知識を用いた他者の意図理解の能力は、簡単な会話に支障がない場合にも、言語発達の課題として、指導の適用を検討する必要があると考えられます。

現在は、幼児期後期から学童期の難聴児を対象に、次の3つの研究テーマに取り組んでいます。

- ① 社会的知識を用いた集団場面における他者の行為意図理解の特徴を明らかにする。
- ② 第三者との関係性を考慮した他者の行為意図理解の獲得過程を明らかにする。
- ③ 集団場面での聴覚補償や教育環境といった環境要因、言語能力や心理社会的側面を含めた個人要因が関与するメカニズムを明らかにする。

表 3課題の図版説明文：分与

図版	説明文：状況文脈なし条件	図版	説明文：状況文脈あり条件
1	Aは1人で遊んでいます	1	Cは友達と2人で話しています
2	BはAに話しかけます	2	DはCに話しかけます
3	BはAに飴をあげました	3	DはCにだけ飴をあげました
4	でも、Aは喜びませんでした	4	でも、Cは喜びませんでした

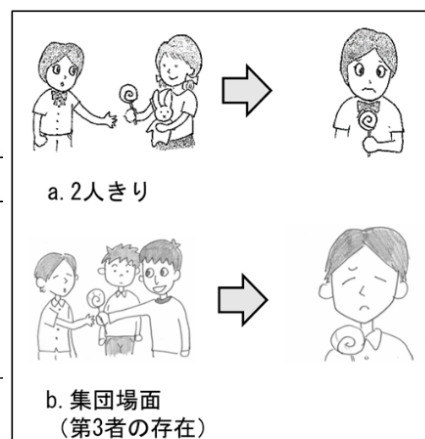


図. 課題場面の例
(アメを貰って困る場面)

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

本研究で得られた知見は、難聴児が日常のやりとりで示す言語コミュニケーションの問題の発生機序の解明および言語指導プログラム立案に寄与すると考えています。

知的財産・論文・学術発表など（詳細は右上 QR コードの教員紹介からご確認ください）

- ・「就学前後期における軽中等度難聴児の言語発達と他者感情の推測能力の検討」
- ・「聴覚障害児における会話時の感情認知・感情説明の発達と、関連要因の検討」
- ・「E-3 コミュニケーション指導の展開②. 廣田栄子 編著. シリーズきこえとことばの発達と支援 特別支援教育・療育における聴覚障害のある子どもの理解と支援」